

婦人グラフ雑誌『淑女画報』(1912~1923)に見る ピアニスト小倉末子と閨秀音楽家たち

津 上 智 実

Pianist OGURA Suye and Women Musicians Reported in a Women's Graphic Magazine *Syukujo Gabou* (1912-1923)

TSUGAMI Motomi

Abstract

This paper reports the result of a thorough examination of a women's graphic magazine, named *Syukujo Gabou*, published from the year 1912 until 1923 in Tokyo, in order to make clear how pianist OGURA Suye (1891-1944) and the other female musicians were represented in its gravures and articles, and further to understand what position western instruments, namely the piano, had in female education in Meiji era Japan.

Pianist OGURA Suye appeared seven times in the gravure pages, once in an illustration, once in an article and once as a theme for poetry. Her appearance's frequency is second only to that of prima donna, MIURA Tamaki, as the head of Japanese female instrumental musicians.

Female education in Meiji era Japan made much of flower arrangement, tea ceremony, and koto playing, but gradually also of western instruments such as violin and piano. Its shift from Japanese traditional koto to the new western piano happened from the end of the 1910s until the year 1920.

The Piano Club of Osaka, established at the beginning of the year 1918, showed active movement in *Syukujo Gabou* in the years 1920 and 1921. It was that time that piano was becoming more and more popular among Japanese women. A phrase in the volume of September 1920 of this magazine reports that every Mary, Jane, and Laura was hooking up to the piano.

It was just the time when OGURA Suye flourished as pianist in many concerts including at Osaka. The existence of OGURA and the other female musicians of that time could have encouraged the younger females in their development as educated ladies.

キーワード：淑女画報、小倉末子、ピアニスト、女性音楽家、大正期、婦人雑誌

Key words: *Syukujo Gabou*, OGURA Suye, pianist, women musicians, Taisho period, women's magazine

本論は、大正年間に発行された婦人グラフ雑誌『淑女画報』（発行期間1912～1923年）を取り上げて、その口絵（グラビア）と記事におけるピアニスト小倉末子¹⁾（1891～1944）と女性音楽家たちの扱いを検討し、そこから大正期における女性の音楽的教養とその中でのピアノの位置を推し量ることを目的とする。

『淑女画報』は、明治45（1912）年4月から大正12（1923）年11月まで東京の博文館から発行された総合婦人グラフ雑誌である。四六倍判、口絵40ページ、本文96ページという構成で、定価25銭（廃刊時は70銭）であった。1937年発行の『博文館五十年史』（230ページ）によれば、本誌は「主として良家の令嬢や家庭の現状を紹介し、最初『婦人画報』と称したるも、四月一日発行の際には『淑女画報』と改題し、甚だ好評にて、大正十二年十一月まで十数年間継続発行したが、同年九月の大震災に際して廃刊した」という。創刊号から第3巻第3号までは松原岩五郎²⁾（1866-1935）、第3巻第4号から終巻までは須藤莊一³⁾（1886-1956）が編集に当たった。

折しも今春、国立国会図書館で開催された企画展示「ビジュアル雑誌の明治・大正・昭和」（於：国立国会図書館東京本館新館展示室、期間：2012年2月1日～3月2日）（於：国立国会図書館関西館大会議室、期間：2012年3月9日～28日）の解説冊子によれば、「テレビもインターネットもない時代、雑誌は貴重なメディアでした。単行本よりも早く、新聞よりもまとまって、たくさんの情報を定期的に伝えてくれる雑誌。特に、絵や写真といったビジュアル面で、雑誌は人々の「見たい」という期待を一身に背負っていました。災害、戦争といった国をあげての一大事から、皇族や著名な俳優の顔、ファッション、子ども向け雑誌、美術、写真…明治・大正・昭和の雑誌には大衆文化とともに、人々の心をとらえたビジュアル表現が華開いています」⁴⁾とあり、雑誌の重要性が強調されている。中でも「グラフ誌」については、「グラフ誌とは、報道を主たる目的として、写真や絵を中心に、見て楽しむ総合雑誌のこと。明治から昭和にかけて、日本の出版界にはさまざまなグラフ誌が存在した。テレビやラジオがなかった時代、あるいは、まだ普及していなかった時代、視覚に訴えるグラフ誌の存在は、われわれが今日考える以上に、重要な情報媒体であった。グラフ誌には歴史的事件やその時代を生きていた人々の生々しい姿が写し出されていて、文章では言い表せない真の姿、説得力、迫力が感じられる」⁵⁾と位置づけられている。

上述のように、『淑女画報』は全ページ数の約三分の一に当たる40ページが口絵部分とされており、女性向けのグラフ誌として、正に「人々の『見たい』という期待」に応えるという役割を果たしていたと考えられる。

1) 『淑女画報』の調査について

『淑女画報』や『婦人画報』といった女性雑誌にピアニスト小倉末子の写真や記事があることは、研究協力者等からの示唆によって、これまでも散発的に知ることができていたが、戦前の婦人雑誌の多くは所蔵状況が複雑で、悉皆調査を実施することができないままになっていた。今年度の調査に当たっては、(1) 財団法人石川文化事業財団お茶の水図書館（女性雑誌

専門図書館)、(2) 財団法人三康文化研究所附属三康図書館(『淑女画報』の発行元であった博文館の館主大橋佐平が明治34年に設立出願した大橋図書館を継承した図書館)(ここでは現物を手に取って見るができるが、残念なことに欠本および閲覧不可の巻がある)、(3) 国立国会図書館、の3館に通って『淑女画報』の各所蔵分を調査した。その上で、これら3館に所蔵のない6巻(第2巻第2号、第3巻の第1号から第4号および第6号)については、金沢学園大学図書館の協力を得て相互利用の形で複写を入手して、悉皆調査を完了することができた。これらの調査先と『淑女画報』の各所蔵状況は次の表1の通りである⁶⁾。

表1)『淑女画報』調査先と所蔵状況

財団法人石川文化事業財団 お茶の水図書館：1(9), 3(5, 7), 4(11), 5(6, 8, 9), 7(1, 6), 8(2, 6, 9, 11, 12), 9(1, 6, 8, 10, 12), 10(2), 11(10), 12(4, 11)
財団法人三康文化研究所附属三康図書館：1(1-9), 2(4-12), 3(1-5, 7-13), 4(1, 3, 6, 10), 5(1, 3, 10, 11), 6(2, 11), 7(1, 2, 6, 8, 12), 8(1-12), 9(1-12), 10(1-12), 11(1-12), 12(1-11)。ただし、以下の号閲覧複写不可：3(1-4), 7-2, 8(4-8), 12(7-9)
国立国会図書館：2(1)～12(9)所蔵、欠号：2(2), 2(5)～3(6)
金沢学園大学図書館(相互利用による閲覧分のみを記載する)：2(2), 3(1-4, 6)

2) ピアニスト小倉末子の扱い

小倉末子(1891～1944)は神戸女学院の第27回卒業生(音楽部第4期生)で、東京音楽学校とドイツのベルリン王立音楽院で研鑽を積んだ後、アメリカで活躍して名声を上げ、1916年の帰国から最晩年に至るまで、ピアニストとして、また東京音楽学校のピアノ教授として活躍した人物である⁷⁾。

『淑女画報』の口絵として小倉末子の写真が掲載されたのは、(1) 第1巻第5号(1912年7月)「海外の誌友」、(2) 第7巻第2号(1918年2月)「春のしらべ」、(3) 第7巻第4号(1918年4月)「春たけなは」、(4) 第8巻第4号(1919年4月)「音楽で名高き三女史」、(5) 第8巻第9号(1919年9月)「大阪の演奏会」、(6) 第12巻第8号(1923年8月)「薫風妙音」の計6回である(次ページの表2参照)。

この内、(1)(3)(5)の3点は今回の調査で初めて見出されたものである。この3点の内容を見ておこう。

(1) はベルリン留学時代の小倉末子のポートレートで、洋装で、本を手にゆったりと椅子に座って写っている。ふっくらとした頬がいかに健康そうに見える。同じページに掲載されている鈴木歌子⁸⁾も、米国桑港(サンフランシスコ)で撮影したもので、やはり洋装である。『淑女画報』で見る限り、当時の日本の女性で洋装をしていたのは皇族と洋行帰りくらいのものであり、洋装を自然に着こなしている小倉末子の姿は極めて例外的なものと人々の目に映ったことだろう。

(3) は大正7(1918)年2月17日に本郷追分帝国大学青年会館で行われた白樺美術館設立募金のための柳兼子独唱会の舞台写真である。この演奏会に賛助出演した小倉末子は、ブラー

表 2)『淑女画報』の口絵に見る小倉末子

(1)	1-5 (1912年 7 月):「海外の誌友」萬樹のみどり夕風に蘇して、ささやく如き茂みのそよぎ、夏は涼しきものにこそあれ。右) 桑港鈴木歌子、左) 伯林小倉末子。[いずれも洋装]
(2)	7-2 (1918年 2 月):「春のしらべ」(右) 音楽学校教授小倉末子女史。女史は数年間欧米楽壇に於いて斯道の研究をかさね、先年帰朝されたる新進のピアニストであります。(左) 音楽学校教授幸田延子女史。女史は我が音楽界の老宿にして目下六十余名の門下生あり、先頃自邸内に壮麗なる音楽教室を新設されました。図はその教室に於ける女史であります。
(3)	7-4 (1918年 4 月):「春たけなは」(左) 二月十七日、帝国大学青年会に於ける音楽会に出演された三間秀音楽家 (向かって右より、柳兼子夫人、小倉末子女史、弘田百合子夫人)。
(4)	8-4 (1919年 4 月):「音楽で名高き三女史」(右) ピアニストとして有名なる小倉末子女史と令姉マリア子の君 (女史邸にて)、(中) アルト唱手として名高き柳兼子女史、女史は文学士柳宗悦氏の夫人でありまして、家庭にありては貞淑なる妻女であると同時に、温良なる慈母であります。(左) 東京音楽学校の教授にしてピアニストとして、天才のほまれ高き久野久子女史 [和装でアップライトピアノの前に座る]
(5)	8-9 (1919年 9 月):「大阪の演奏会」(上) 七月十八日、大阪中央公会堂の演奏会に出演したるピアニスト小倉末子女史と、義姉マリヤ夫人、(右下) 同じく出演して大喝采を博したる小倉末子女史 [洋装] と鈴木のお子女史 [和装]。二人の少女は北川あき子及び同えい子の二嬢で、演奏後二女史に花束をささげました。
(6)	12-8 (1923年 8 月):「薫風妙音」(右) 東京音楽学校教授ピアニスト小倉末子女史、(中) 女子学習院教授にして又日本に唯だ一人の女流作曲家と云われる松島彝子女史

ムス作曲〈自作主題による変奏曲〉作品21、リスト作曲〈泉のほとり〉、シンディング作曲〈春のささやき〉作品32の3曲を演奏したことが、これまでの調査で分かっていたが、舞台写真が出て来たのは今回が初めてである。ここではグランド・ピアノの前に座る小倉末子も、柳兼子も、また柳兼子の伴奏者を務めた弘田百合子も、艶やかな裾模様の和服姿である。

(5) は大正 8 (1919) 年 7 月 19 日に大阪中央公会堂で行われたピアノ同好会および大阪楽友会主催「小倉末子女史、鈴木のお子女史出演大演奏会」に関わる写真 2 点である。この演奏会については、1919 年 7 月 19 日付および 20 日付『大阪朝日新聞』に記事があり、それによれば、7 月 18 日に東京から来阪した小倉末子は「是れは又珍しい、何時も見慣れたあのキツとした洋装とは打って変わった優美な和服姿青陶磁色の派手な豎縞明石の薄物を身に纏うて翡翠の帯締めとダイヤの指輪がキラリと輝く」という装いであったが、翌日の舞台では「前日の和装をサラリ脱ぎ捨てて薄桃色の洋装目も冷 [ママ] めるばかりに扮装」と伝えられる。『淑女画報』の写真 2 点は、正にこの記事に対応している。上の写真は、豎縞の着物でアップライト・ピアノに向かっており、7 月 18 日に宿泊先の大阪ホテルのピアノで練習する小倉末子を写したものと考えられる。一方、右下の写真は、終演後の舞台で花束を受け取る様子の写真で、小倉末子は薄物の洋装である。

このように、ベルリン留学時代の新しい写真や、特定の演奏会の様子がよく分かる舞台写真が複数出て来たのは、今回の調査の収穫である。

その他に、(2)は自宅レッスン室での小倉末子⁹⁾、(4)は自宅の庭で兄嫁のマリアと共に写った写真¹⁰⁾、(6)は扇子を手にきりっとした和服姿のポートレート¹¹⁾である。

以上の写真に加えて、イラストでの掲載として、第6巻第2号(1917年2月)「婦人界大正五年史(近藤浩一路)」の「四月(一)我楽壇に帰れる新聞秀ピアノスト小倉すゑ子女史」がある。ここではロング・ドレスを着てピアノを弾く姿が軽妙なイラストで描かれている。1916年4月23日の小倉末子の帰朝は、その年の大きな話題であったことがここからも確認できる。

『淑女画報』は前半の口絵と後半の記事から成るが、記事として小倉末子を取り上げられたものとして、第8巻第4号(1919年4月)の「訪問印象、現代名流婦人一百人(四)、TOK女」(50～52ページ)がある。ここでは、「男爵園田孝吉氏令嗣夫人園田京子、与謝野晶子女史、小倉末子女史、徳川頼倫侯令嗣頼貞氏夫人徳川為子、実業家志立鉄二郎氏夫人志立たき子、亀高文子女史、山田菊子嬢、中條百合子女史、東京府知事夫人井上鼎子、目賀田男爵夫人逸子」の10人が取り上げられている。

この記事で小倉末子については、「非常に輪郭の鮮やかな、強みのあるお顔立ちで一度お目にかかったら何千何百人の婦人方の間にでも決して見逃しするような事はない、印象の深い方です。洋装の時は水色か純白、日本服の時は黒の地質がお好みで時々華やかなオレンジの帯なんかお締めになる事もあります。弾奏に於ては恐らく日本の楽壇で第一人者でありましょう、女史のテクニクは非常に鮮やかです。何を弾いても、どんな難曲を弾いてもそれを統一する丈けの理解力を持っていらっしゃる。日本の楽壇、妙に狭くらしい官僚主義を眞向に振りかぶっている日本の楽壇で、この立派なピアノストを割合歓迎しないとは何うした偏見でありましょう。官僚主義を薙ぎ倒せ、そして世界的の廣い公平な眼を以つて芸術の花を愛せよと、ピアノスト小倉女史のために叫び度い位です」と記されている。書き手(TOK女)は小倉の実力に比して楽界の扱いが不当であるという認識を持ち、小倉のために悲憤慷慨している様子が窺われる。

他に、歌が捧げられたものとして、第9巻第2号(1920年2月)の文芸コラム、阿部仲次「大音楽会にて」(43ページ)がある。ここでは「ピアノ独奏(小倉末子女史に寄す)」として以下の5首が詠まれている。

瀧津瀬とピアノのしらべ音をしげみひとすぢしろくたぎちけるかも
いまははや瀧津瀬となりピアノの音たぎちのかぎりたぎちけるかも
陰影の湿らひふかきピアノの音リズムさみしくながれけるかも
潮騒の遠音とはきけピアノの音ひととどだへしそのたまゆらを¹²⁾

「大音楽会にて」とあることから、これは前年(1919年)10月17日に青年会館で行われた京華高等女学校同窓会主催「大音楽会」に取材したものではないかと推察される。

以上のように、『淑女画報』において小倉末子は、口絵として6回(写真点数は7点)、イラストとして1回、記事として1回、歌詠みの対象として1回、取り上げられていることが明らかになった。

3) 女性音楽家たちの扱い

しかし、小倉末子の扱いは、小倉の記事だけを見ても分からない。同時代の他の音楽家がどのように扱われているのかを見て初めて、小倉末子の位置づけが浮かび上がってくる。そこで、次に『淑女画報』における女性音楽家たちの扱いを概観してみたい。「閨秀音楽家」としてグラビア写真に取り上げられている女性音楽家たちを整理すると、表3のようになる。

表3)『淑女画報』の口絵に見る女性音楽家たち

11回：柴田環／三浦環（1-3, 1-7, 3-1, 3-4=2回, 3-5, 3-7, 4-10, 8-2, 11-7, 11-9）
8回：小倉末子（1-5, 6-1, 7-2, 7-4, 8-4, 8-9=2回, 12-8）
7回：久野久子（6-1, 6-8, 8-4=記事中にも写真あり, 9-1, 12-1, 12-4）
6回：原信子（1-9, 2-1, 2-4, 2-5, 4-10, 8-4）
4回：柳兼子（7-4, 8-4, 9-3, 11-8）、永井郁子（9-3, 11-4, 11-7, 11-8）、豊田旭穰（2-4=2回, 2-5, 8-4）
3回：高折寿美子（3-1, 8-4, 8-5）、松島つね子（4-10, 11-7, 12-8）、花島秀子（6-8, 9-1=2回）、武岡鶴代（8-5, 9-3, 12-7）、ベツォルド夫人（9-3, 11-8, 11-9）、安村禎子（10-11, 11-4, 12-1）
2回：幸田延子（1-1, 7-2）、安藤幸子（1-1, 7-2）、高橋はる子（3-5=2回）、岩田さと子（9-1, 9-4）、鈴木のお子（8-9, 10-6）、楽夕会（9-3, 10-5）、宇佐見ため子（9-3, 11-8）、内藤周子（9-11, 10-2）、本居みどり＋貴美子（11-4, 12-8）、曾我部静子（11-5, 12-4）、山根貞江（11-9=2回）
1回：クランゲンゾルプ夫人（1-1）、北村初子（1-9）、豊竹昇菊（2-4）、高島要子（2-4）、神戸絢子（3-1）、松島糸壽（3-1）、関屋敏子（3-5）、モット夫人（3-12）、長井エルザ（4-8）、弘田百合子（7-4）、神戸貞子（8-2）、グラホスカ夫人（8-5）、中原暉子（8-7）、出島せい子（9-1）、佐藤節子（9-1）、柴田秀子（9-4）、矢野寿美子（10-3）、鐵よ〇[1字欠]子（10-3）、御木本練子（10-8）、シューマン・ハインク夫人（10-8）、喜多襄子（10-11）、根来夏月（10-11）、金子真佐子（11-5）、鈴木稲子（11-5）、渡邊しづ子（11-5）、名和君代（11-8）、荘司ひさ子（11-8）、内田さと子（11-8）、吉田絹子（11-8）、瀧川瀧江（11-9）、大谷素子（11-12）、中谷富士子（12-3）、松野芳枝（12-3）、酒井千枝子（12-3）、アンナ・ブブノワ（12-3）、石橋君子（12-4）、早川美奈子（12-7）、榊原みね子（12-7）、吉田静子（12-9）

この表3から明らかなように、最も頻繁に取り上げられているのは三浦環（柴田環時代の2回を含む）の11回である。小倉末子はそれに次ぐ8回で、それに7回の久野久子、6回の原信子、4回の柳兼子と永井郁子、3回の高折寿美子、松島彝子、花島秀子、武岡鶴代、ベツォルド夫人、安村禎子、2回の幸田延子、安藤幸子らが続く。

東京音楽学校校長であった湯原元一も「声楽で有名になった人はあるが、器楽で有名になった人は稀である」（1917年4月6日付『東京日日新聞』）と述べており、小倉の8回については、器楽奏者としては第一位という見方も成立するだろう。世界の蝶々さんとして話題を集めた三浦環は別格として、国内で活躍する女性音楽家の中で、小倉末子は筆頭の地位を『淑女画報』で占めていると考えることができる。

時代の流れとして感じられることとして、大正11、12年頃になると、東京音楽学校の新卒者

たちが「新進音楽家」として紙面で紹介されるようになる。これは東京音楽学校のレベルが上がってきて、卒業後、音楽家として活躍することが期待されるようになったことを示していると思われる。具体的には、第11巻第5号で紹介された金子真佐子（ピアノ）、鈴木稲子（ソプラノ）、曾我部静子（アルト）、渡邊しづ子（ヴァイオリン）、第12巻第3号に写真が掲載された中谷富士子（ピアノ）、松野芳枝（ピアノ）、酒井千枝子（アルト）、第12巻第5号に掲載の石橋君子（アルト）らがいる。

この他に特筆すべきものとして、ピアノ同好会の9回（7-9, 8-7, 9-1, 9-7, 9-9, 9-11, 10-2, 10-3, 10-9）があるが、これについては節を改めて後述する。

4) 令嬢の教養とピアノ

女性音楽家たちを追いながら『淑女画報』を見て行くと、上流階級の夫人や令嬢たちの音楽的教養の変化にも自然と気づくことになる。

『淑女画報』には、巻頭の皇族の写真に続いて、各地の名士の夫人や令嬢たちの写真が多数掲載されており、そこには名前や身分に加えて（令嬢の場合には年齢や学歴）、どのような趣味や素養を持っているかが書き添えられていることが多い。写真はお見合い写真風のポートレートが主流であるが、趣味や素養が持ち物や身の回りの物によって画像の中で表現されている場合もある。

まず最も目につくのは琴を弾く令嬢たちである。例えば、第2巻第5号の口絵「書家獅子田洞春令妹淑子（十七歳、本郷）」は「丹青の技をよくし、長唄箏曲等にも堪能」とされ、和装で琴を弾く写真がある。同巻第8号の口絵「鳳鳴龍吟」には、箏（3面）、琵琶（1）、笛（1）、不明の弦楽器（1）を手にした和装の令嬢たちの写真が掲載されている。第3巻第1号の「法学博士江木衷氏夫人栄子の君」は「琴、三味線は申すに及ばず、お鼓、お笛より、さては簫をも吹き給ふ。更に馬にも召さるると思えば一日一夜お書斎にこもって篆刻もなさる」とあり、これらの趣味に取り組む姿が複数の写真で示されている。第8巻第10号『結婚改善号』の口絵「ほまれのしらべ」には、三人の令嬢がいずれも琴を弾く姿で掲載されている。

一方、ピアノに寄り添う姿の写真も、次第に増えていく。例えば、第5巻第10号『令嬢修養号』の「令嬢十態（一）」「太陽生命保険会社重役清水文之輔氏令嬢あき子の君（芳紀十九）と同じくみや子の君（芳紀十八）」の「ピアノ［アップライト］によれるはあき子嬢、ヴァイオリンを奏づるはみや子嬢」、第6巻第8号の「工学博士葛西萬司氏令嬢ふみ子の君（養嗣子夫人）のピアノ演奏」[和装でアップライト]、第7巻第4号の「医学博士前田珍男氏令嬢修子の君（芳紀二十一）のピアノ」[和装でアップライト]、同巻「実業家斎藤参吉氏令嬢晴子の君（芳紀十八、東京女学館在学）のピアノ」[和装でアップライトの前に座る]とある。さらに第8巻第5号、第10巻第11号、第11巻第12号にも同様の写真を見ることができるが、置かれているピアノはいずれもアップライトである。

さらに、第3巻第2号の口絵「衆議院書記官長林田亀太郎氏令嬢千代子の君（芳紀十七歳）」に「日本女子商業学校在学中にして琴、茶の湯、生花を初めピアノ、ヴァイオリン等和洋の遊芸に堪能だそうです」とあるのを皮切りに、「ピアノに堪能」というフレーズが次第に目につ

くようになっていく。「ピアノに堪能」「ピアノ〔ママ、以下同じ〕が非常にお上手」「ピアノを熱心に御稽古中」「ピアノの趣味深く」といった言い回しが出て来る巻を列挙してみると、3-2, 9-6 (3件)、9-11, 9-12, 10-1 (2件), 10-2 (3件), 10-4, 10-9, 11-6, 12-6となり、大正9 (1920) 年から急激に増えていることが明らかである。

このように『淑女画報』の口絵に見る令嬢達の教養は、「琴、茶の湯、生花」から「ピアノ、茶、生花等」へと変化しており、その変化の如実な現れは大正9 (1920) 年にかけての時期に見られる。

さらに、夫人向けの芸事においても、同じような変化が認められる。第6巻第5号の「芸づくし」には「目下婦人界に行わるる遊芸のいろいろ」として「仕舞、薙刀、三味、小鼓、踊、素踊、琴」が挙げられているが、第7巻第4号の「趣味と技芸と婦人のさまざま」になると、「丹青の道、茶の湯、仕舞、ヴァイオリン、家庭絞り染、マンドリン、ピアノ（あらゆる名曲が転んで出づるピアノの音）〔和装でアップライト〕、盆景、長唄」と範囲が拡大して、そこに「ヴァイオリン、マンドリン、ピアノ」といった西洋楽器が入り込んでいる¹³⁾。

記事を見ると、初期の頃には、ピアノに対して懐疑的・批判的な意見が散見される。「とある女学校にては、ピアノを教ゆる所ありとか、そを覚えて何かせん、ピアノを買い得る資産家の娘幾人あるや、よしや嫁ぎ先の富有なるにまかせて求め得らるるとも、ピアノを解し得る男子幾人ありつるや」（華陽夫人、「白晝流視、女論語」第2巻第4号）といった意見や、「のみならず、ピアノなどになりますと、持運びに不便ばかりか、如何にも大層になりますので、一般的と申すよりは、寧ろ特殊のものとして、一部の社会以外には望むべくもありません」（日本銀行理事吉井友兄氏夫人吉井ちか子「娘の為に遊芸の選択」第6巻第5号、22～24ページ）という声が寄せられている。

一方、「十五歳になるのと、十四歳になるのと、二人の女の子。共に学習院の女学部に通っておりますが、学校以外の教育に就いてもいろいろ苦心しているのです。目下、音楽はピアノを稽古させています」（柳原伯爵「家庭教育」第2巻第8号）という家庭もあるが、同じ記事の中で当の柳原伯爵は、「現代の日本は過渡期にある、文字を書くにも、万年筆も使えば毛筆も使う。読書にしても、漢籍も読まねばならぬし、英、独、仏の内一か国語位は読まねばならぬ。…まことに煩雑な和洋折衷の状態にある。殊に困るのは日常必須の衣食住にも、此の和洋折衷がついてまわる事。たとえば和服も着るし洋服も着る。日本料理も食べれば西洋料理、支那料理も食べる。坐りもすれば椅子にもかける、琴や三味線のような日本在来の音楽もあれば、ピアノやヴァイオリンのような西洋音楽もあると云った風で、その為めに我々が精神の上及び肉体の上に受ける負担は非常に重い」と嘆いている。

このような流れの中で、第5巻第10号（1916年10月）の記事「名流令嬢の嗜みと読書」は、当時の有識者たちの家庭における女性の教養の捉え方を炙り出して興味深い。ここでは、「(一) 令嬢様の嗜みは？ (二) 令嬢様の読書は？ (三) 御結婚前の御教養にて役立てるものは？」という三つの質問が編集部から投げかけられている。

回答者は（子どもが幼少だからといった理由で回答しなかった者は除いて）次の30名である。大阪府立高等医学校長医学博士佐多愛彦氏夫人佐多静子、東京音楽学校長湯原元一、佐治実然、

文学博士桑木義零氏夫人桑木誠子、医学博士本多忠夫氏夫人本多春子、衆議院議員三輪信次郎氏夫人三輪はつ子、読売新聞社長本野英吉郎、文学士下田次郎氏夫人、法学博士堀江煥一、文学博士佐々木信綱氏夫人佐々木雪子、東京女学館幹事西田敬止、伯爵柳原義光、安田善三郎氏夫人安田暉子、東京高等工業学校長手島精一、林学博士本多静六氏夫人本多銓子、文学博士加藤玄智氏夫人加藤せつ子、法学博士栗津清亮、故京都市長井上密氏夫人井上絲子、衆議院議員菊池武徳氏夫人菊池ひで子、子爵小笠原長生氏夫人小笠原秀子、文学士三輪田元道氏夫人三輪田秀子、鑄木清方画伯夫人鑄木照子、東京女医学校長吉岡弥生、法学博士水野練太郎、高島平三郎氏夫人高島壽子、東京高等女学校長棚橋絢子、東京高等蚕糸学校長本多岩次郎氏夫人、文学博士田中義成氏夫人、海軍少佐松本許氏夫人松本俊子、与謝野晶子。

問い（一）「令嬢のお嗜みは？」に対するこれらの人々の回答をまとめてみると、表4のようになる。

表4）「令嬢のお嗜みは？」に対する回答

生花（17）
茶の湯、琴（各15）
音楽（6）
ピアノ／洋琴、外国語、裁縫、割烹（各5）
絵画（4）
長唄、三味線、習字、英語（各3）
西洋音楽、フランス語（各2）
和洋音楽、和歌、踊り、舞踊、仕舞、洗濯、袋物、刺繍、造花、盆石、唱歌、插花、園芸、謡曲（各1）

表4に見るように、最も多いのは、生花、茶の湯、琴であり、大きく水を空けて、音楽、ピアノ（洋琴を含む）、外国語、裁縫、割烹が続く。大正5（1916）年の段階では、伝統的な教養が圧倒的な人気を誇り、ピアノや西洋音楽等はまだまだ一部の人のものでしかなかったことが察せられる。

もっとも回答文を丁寧に見て行くと、すでに熱心に取り組んでいる家庭もあったことが分かる。例えば、「長女（十五歳）はピアノと和歌、次女（十四歳）はピアノと琴、三女（十歳）は琴。学校の余暇がございましたら外国語もさせたい」「昨年来十歳と八歳の娘には長唄を習わせて居り追々之を下地として和洋音楽に進めさせるとの母親の考案」といった希望を親が持っているケースもあれば、「外国語、音楽、茶の湯、生花等。茶の湯、生花は女学校卒業前位より始めます。音楽は皆の望通り西洋楽を致させます」「娘共各自の好みにより生花、琴、洋琴など稽古」「八歳の事ですから、只今の處唱歌のけいこ丈、本人の望はピアノで御座います」というように、子どもの方が洋楽やピアノを希望する場合もあったことが分かる。

第7巻第5号（1918年5月）になると、京都皇宮殿掌子爵石野基道氏夫人石野孝子が記事「趣

味を基とした生活」(36～39ページ)において、まず自分の趣味について「私は絵画の他に、謡曲、鼓、仕舞と茶の湯に活花などにも多少趣味を持って、余暇な時には之を楽しんで居ります」とした上で、21歳の三女の教育について、次のように述べている。「和子には、学校を卒業して結婚いたしますまで、好きな絵画は申すまでもなく、琴、ピアノ、ヴァイオリンなど、こうした遊芸も仕込みました／私共は、洋楽には一向趣味を持ちませんが、併し娘がこうして稽古を致しますので、何時とはなしに面白いようになり、近頃は夜分やまた祭日などには、私や娘の琴、ヴァイオリン、ピアノなんかを、主人の笛と合奏するのを何よりの楽しみとして居ります」。このように娘の世代が新しい教養として学び始めた洋楽が、次第にその家庭に浸透して、受け入れられて行ったというのは自然な流れであり、当時の多くの家庭で見られた現象だったのではないかと想像される。

第9巻第9号(1920年9月)に至ると、赤松生の記事「浪花便り、趣味の婦人」(14～15ページ)において、「琵琶、ヴァイオリンは、一世紀前の流行物として廃れ、今は猫も杓子もピアノの大流行、ピアノでなければ、夜が明けぬとまでに、中流以上の婦人達には愛されています。ピアノ同好会は、それに趣味のある婦人達を網羅したもの」と論じられて、この頃、ピアノの人氣が非常に高まったことが窺われる。

5) ピアノ同好会

女性とピアノという視点から興味深い団体として、大阪のピアノ同好会があるが、『淑女画報』においてもこの団体の活動が頻繁に取り上げられている(計9回)。ピアノ同好会は、「ピアノ音楽の振興を計り会員の趣味技能を向上せしめ高潔優美の趣味を涵養し会員相互の親睦を計るを目的」として大正7(1918)年の年初に設立された。ピアノ同好会については塩津洋子氏の研究¹⁴⁾が詳しいが、『淑女画報』には従来の音楽研究において見落とされていた写真や記事があり、今後の精査が求められる。その一助として、今回の調査で見出されたピアノ同好会関連の口絵ならびに記事を表5として次ページに掲げる。

この内、第9巻第9号の記事中に次のインタビュー記事がある。

中江百合子さんは之に就て「最初は、お互いに弾き合ったら研究になるだろうと申したのが始まりで、ちょうど湯本あい子さんが大阪へ来られたのを幸い、私ども二三のものが三越のルイ室で第一回の研究会を致しました。始めは、僅か四十人位であったのが、この節はざっと百二十人、湯本あい子さん、高安やす子さん、横尾しづ子さん、荒木こう子さん、関口ふゆ子さんと私の六人が幹事で、隔日〔隔月の誤記か?〕に一回ずつ、研究会を催して居ります」とのお話。会員には…[中略]…などの名前が見えている。

ここから、大正7(1918)年の創設から、このインタビューが行われた大正9(1920)年にかけて、ピアノ同好会の会員数が急激に増えていった様子が読み取れる。大阪のピアノ同好会については、評論家の牛山充が「大阪にはピアノ同好会もあるが東京にはない。何とかして同好家が集まってよい会を組織し、こうした名手が来た時に、腕一杯のところを演奏出来るよう

表 5)『淑女画報』に見るピアノ同好会関連の口絵と記事

7-9 (1918年 9 月):「大阪婦人界時事」「ピアノ弾奏会」大阪ピアノ同好会主催のショルツ氏弾奏会が、七月十二日大阪ホテルに於いて開かれました。(左) 同氏の弾奏振り。(右) 同好会幹事の方々 (湯本愛子、大塚惟明氏夫人、外山捨造氏夫人、荒木都一氏夫人、中江百合子、小村薬学博士夫人)
8-7 (1919年 7 月):「ほまれの面影」大阪基督教女子青年会総会に於いてピアノを独奏して喝采を博したる <u>中原璋子嬢</u>
9-1 (1920年 1 月):「関西婦人会の花形」(中) 演奏会を開かれたる <u>楽夕会</u> 幹事の奥様令嬢方
9-7 (1920年 7 月):「大阪ピアノ同好会」大阪の名流夫人令嬢方の間にピアノ同好会というのが組織されていて隔月一回研究会が開催されます。之は同好会例会を中江産業株式会社社長中江種一氏邸に於いて開いた折の祈念「ママ」撮影であります。「大阪名流婦人噂話」赤松狐村、高安やす子、 <u>ピアノ同好会</u> 、 <u>範多みどり</u> 、 <u>清瀬比那子</u> 。
9-9 (1920年 9 月):「浪花便り、趣味の婦人」 <u>ピアノ同好会</u> は、それに趣味のある婦人達を網羅したものです。中江産業株式会社社長中江種一氏夫人百合子、高安博士夫人やす子、日本水力電気の取締役関口壽氏夫人ふゆ子さんなどが中心となって、昨年の春始めて「ママ」産まれたものです。
9-11 (1920年11月):「ピアノ同好会」大阪ピアノ同好会は中江百合子夫人の問題から幹事の脱会事件が起こり、ゴタゴタしていましたが、今回有力者の儘力によって復活し、九月二十六日高島屋に於いて例会を開きました。(上) 右、工学士葛野維一郎氏夫人しの子、左、工学士内藤太郎氏夫人周子。(下) 同会の会員席の一部 (前列向かって右より、六島きぬ子、大森ふみ子、瀬川とも子、久保寿貞子、中原璋子諸嬢)。
10-2 (1921年 2 月):「マダムぶり」(中) 工学士内藤太郎氏夫人 <u>周子</u> の君。夫人は <u>大阪ピアノ同好会</u> の中堅として有名。
10-3 (1921年 3 月):「二閨秀音楽家」大阪ピアノ同好会の音楽大会に出演、 <u>矢野寿美子女史</u> とその門下のソプラノ <u>鐵よ〇</u> 「1 字欠」子女史。
10-9 (1921年10月):「ピアノ同好会の新進」 <u>大阪ピアノ同好会</u> の例会にピアノの連弾や独弾を演奏された方々。岩本君子、戸田美代子、井上すゑ子、佐々木千代子、藤井由紀子、池水とし子、諸嬢で何れも同会の新進花形です。

な準備があつてほしい」(東京音楽学校校友会『音楽』1926年 6 月)と評しており、東京に先駆けた先進的な団体であつたことが分かる。その隆盛の基を築いたのが1910年代の終わりから1920年にかけての時期であつた。これは、小倉末子の活躍の時期とも重なつて、女性のピアノ熱が高まつていった時期であつたと見ることができる。

6) まとめ

以上の『淑女画報』の悉皆調査によって、(1) ピアニスト小倉末子の掲載は、口絵として 6 回 (写真点数は 7 点)、イラストとして 1 回、記事として 1 回、歌詠みの対象として 1 回あること、(2) 口絵の写真 7 点にイラスト 1 点を加えた計 8 点という数字は、三浦環の 11 回に次ぐ次点であり、器楽奏者としては第一位であること、(3) 令嬢たちの教養が「琴、茶の湯、生花」から「ピアノ、茶、生花等」へと変化しており、その変化の如実な現れは大正 9 (1920)

年に見られること、(4) 夫人たちの教養も洋楽を含む方向で拡大していったこと、(5) ピアノ同好会の活動も大正9(1920)年と大正10(1921)年を中心に度々報じられていること、(6) 大正期におけるピアノの愛好は1910年代の終わりから1920年にかけて急激に高まり、「今は猫も杓子もピアノの大流行、ピアノでなければ、夜が明けぬとまでに、中流以上の婦人達には愛されています」と評されるに至ったこと、が明らかとなった。

今回の調査によって、婦人雑誌には当時の女性音楽家たちについてはもちろん、夫人や令嬢たちの音楽的教養を知るための手掛かりや情報が豊かに含まれていることが実感として明らかとなった。今後は『婦人画報』等にも調査の対象を広げて、より立体的な歴史像を描き出していきたい。

謝辞

これらの研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号22520164「ピアニスト」の誕生を考える：明治末期から昭和初期の本邦洋琴家事情の解明」および神戸女学院大学研究所2011年度「総合研究助成」(研究課題：ピアニスト小倉末子の音楽活動および業績の総合的研究)によって支えられていることを感謝して記す。

注

- 1) 戸籍上は「小倉末」であるが、演奏会プログラムの多くや3冊の著書において「小倉末子」を使用していることから、ここでは後者の表記を採用している。
- 2) 明治時代のジャーナリスト。明治25(1892)年国民新聞社に入社。東京の下層社会を探訪して詳細なルポを『国民新聞』に掲載するなど活躍した。
- 3) 大正から昭和時代の小説家。長年、博文館『淑女画報』の編集主任を務めた。大正7年『白鼠を飼ふ』で文壇に登場し、『文芸道』を主宰した。
- 4) 国立国会図書館編集『国立国会図書館企画展示、ビジュアル雑誌の明治・大正・昭和』(2012年2月1日発行)3頁。
- 5) 同、8頁。
- 6) これらの表において、例えば「1(9)」ないし「1-9」は「第1巻第9号」を意味している。
- 7) 小倉末子の生涯と音楽活動については、津上智実編著『100年前の卒業生、ピアニスト小倉末子の軌跡、図録』(神戸女学院小倉末子展実行委員会、2010)、ならびに、津上智実、橋本久美子、大角欣矢著『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』(東京藝術大学出版会、2011)を参照。
- 8) 帰国後は女優として活躍し、1915年の「嵐又は春がすみ」(天活東京)から1937年の「淑女は何を忘れたか」(松竹大船)まで135本の映画に出演した。
- 9) 津上智実、橋本久美子、大角欣矢著『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』(東京藝術大学出版会、2011)のグラビアに掲載。
- 10) 同書、33ページに掲載。
- 11) 台東区立旧東京音楽学校奏楽堂で行なった展示「ピアニスト小倉末子と東京音楽学校」(会期2011年10月30日～12月11日)の第3室(昭和期)において展示した。
- 12) 他に「高音独唱(岩田さと子女史に寄す)」として5首がある。
- 13) この点で第3巻第4号「弁護士法学士鳩山一郎氏夫人薫子の君」[和装でアップライト・ピアノに向かう]のグラビア掲載は極めて先駆的な例である。
- 14) 塩津洋子『『ピアノ同好会』の活動』『音楽研究』(大阪音楽大学音楽博物館年報)第25巻(2010年5月発行)参照。

(原稿受理日 2012年2月29日)